

ダアワ党とシーア派宗教界の連携：現代イラクにおけるイスラーム革命運動の源流

山尾, 大
九州大学大学院比較社会文化研究院

<https://hdl.handle.net/2324/21869>

出版情報：現代の中東．(41)，pp.2-20，2006-07．日本貿易振興機構(ジェトロ) アジア経済研究所
バージョン：
権利関係：



ダアワ党とシーア派宗教界の連携

—現代イラクにおけるイスラーム革命運動の源流—

山尾 大

はじめに

- I イラクの政治・社会状況とダアワ党の創設
 - II ダアワ党の理念とシーア派宗教界
 - III ダアワ党指導部とその変遷
- おわりに

はじめに

現代イラクは、劇的な政治変動を経験している。概観すると、1958年の共和国革命から1968年のアラブ社会主義バース党 (Ḥizb al-Ba‘th al-‘Arabī al-Ishtirākī, 以下、バース党) 政権成立までは、三つの政権が短期間のうちに入れ替わる、不安定な時期であった。一方、1968年から2003年までのバース党政権では、数々の戦乱にもかかわらず、国内体制は比較的安定を保っていた。2003年以降はきわめて混乱した状況が続いている。

本稿で扱うイスラーム・ダアワ党 (Ḥizb al-Da‘wa al-Islāmīya, 以下、ダアワ党) は、1958年革命前夜に発足し、不安定な10年間で勢力を拡大した。その後バース党政権の苛烈な弾圧を生き延び、イラク戦争後の2005年には、イブラーヒーム・ジャアファリー (Ibrāhīm al-Ja‘farī) 党首を移行政権の首相に輩出するなど、イラク政治の中枢に躍り出た。現代のイラク政治における、

ダアワ党の重要性は論を待たず、現在、その研究は緊要の課題と認識されつつある。

ダアワ党理解においてひとつのカギとなるのは、シーア派宗教界との関係であろう。例えば、2005年1月の国民議会 (国会) 選挙に先立ち、ジャアファリー党首は現在のシーア派最高権威であるアリー・スィースターニー (‘Alī al-Sīstānī) 師とナジャフで協議を行い [al-Zamān 2004], 同師の支持をとりつけた。また、2005年12月の国民議会選挙の際も、両者は会合をもち [al-‘Arabīya TV 2005], 年が明けてからも、ジャアファリー党首はナジャフに出向いて会談を行い、スィースターニー師はイラク新政府早期樹立の必要性を強調した [al-‘Arabīya TV 2006]。

このように、最近の政治状況を見ると、ダアワ党はシーア派宗教界の動向を見極めて政策を決定していると言える^(注1)。これは現在に限ったことではない。ダアワ党は、シーア派宗教界との密接な関連をもって創設されたのである。そこで本稿では、政党とシーア派宗教界の関係を解きほぐす手がかりとして、両者が緊密な関係を保持していたダアワ党成立期 (1957～72年)^(注2)に焦点を当てたい。

本稿は、これまで明確でなかったダアワ党創設のプロセスを明らかにし、指導部メンバーの構成と組織・活動をとおしてダアワ党とシーア

派宗教界、すなわちハウザ (al-ḥawza al-‘ilmīya) およびシーア派最高権威のマルジャイーヤ (marja‘īya) との関係に分析を加えるものである。まず、第Ⅰ節では、ダアワ党成立の背景となるイラクの政治・社会状況をふまえて、成立のプロセスと要因を論じる。次に、第Ⅱ節では、ダアワ党の創始者の一人であるムハンマド・バーキル・サドル (Muḥammad Bāqir al-Ṣadr, 1935～80年、以下、サドル) の政治思想をとおしてダアワ党が掲げる理念を検討し、第Ⅲ節ではダアワ党の実際の指導部と組織活動を確認する。以上をとおして、包括的な成立期ダアワ党像を描き、党指導部とシーア派宗教界の関係を明らかにしたい。

Ⅰ イラクの政治・社会状況とダアワ党の創設

本節では、ダアワ党成立時のイラクの政治・社会状況を概観し、結党に至る背景を確認する。その上で、これまで明確でなかったダアワ党成立のプロセスとその担い手を明らかにし、結党の社会的・政治的要因を分析する。

1. 1958年共和国革命前夜のイラクの政治・社会状況

王政後期のイラクは、ヌーリー・サイード (Nūrī al-Sa‘īd) 首相とその側近など、英国および国王と強い関係をもつ人物が政治決定の中心を占め、彼ら政権中枢の意向がきわめて強く政策に反映される体制であった。しかし、イラクには議会があり、寡頭政治に歯止めをかける制度も存在した。

とりわけ1946年には、アラブ民族主義を掲げる独立党 (Ḥizb al-Istiqlāl) や、社会主義と国民主義に立脚する国民民主党 (al-Ḥizb al-Waṭanī al-

Dīmuqrāṭī) をはじめとして、六つの政党が次々と結成され、49年には諸政党合同の「憲法憲章」 (al-Mithāq al-Dustūrī) を掲げて憲法改正を迫るなど、部分的な民主主義が存在していたのである [Shubbar 1989, 217-218]。また、54年に行われた議会選挙においては、独立党や国民民主党、イラク共産党 (al-Ḥizb al-Shuyū‘ī al-‘Irāqī) などが野党連合組織として国民統一戦線 (al-Jabha al-Waṭanīya al-Muttaḥida) を結成し、民主主義の確立や英国の介入反対などを要求して135議席中14議席を得たことからわかるように、比較的自由な民主的選挙が行われていた^(注3)。さらに、こうした動きに対して、サイード首相が政党活動の禁止で対抗しようとする、諸政党は今度は統一国民戦線 (Jabha al-Ittiḥād al-Waṭanī) を結成し、サイード内閣の解散と反英を掲げてアブドゥルカリーム・カースィム (‘Abd al-Karīm Qāsim) 准将率いる自由将校団 (al-Ḍubbāt al-Aḥrār) と連帯行動をとることになる^(注4)。

このように、共和国革命前夜のイラクにおいては、政党活動がきわめて活発に行われており、比較的自由な政治空間が存在していたとすることができる。この状況のなかで、ムスリム同胞団 (Jamā‘a al-Ikhwān al-Muslimīn) も活動を開始した。ダアワ党をはじめとするイスラーム政党・政治組織が出現する背景として、以上のような活発な政党活動と、ある程度の自由な政治空間に着目することが重要である。

一方、社会に目を向けると、都市開発や鉄道網・道路網の整備などにみられるように、王政下のイラクにおいては急激な近代化が進行していた。その結果、バグダードなどの大都市が発展するなかで、イラク南部の開発がはなはだしく遅れるという、「都市・地方間格差」が発生し

た。それに伴って、南部をはじめとする地方から大都市への人口流入が急増し、イラクは典型的な都市集中型の社会に変化していくことになる。1947年から57年までの10年間で、モスルで33.4%、バスラで62.2%、バグダードで53.9%の人口増加をみせている[Batatu 1978, 35]。酒井(1991, 68)で明確に分析されているように、一方で、バグダード側が地方民を引きつけた要因として都市生活における雇用機会、所得水準の高さが、他方で、地方農村側からの離反要因として生活水準の低さ、大土地所有制度と部族社会に対する不満が、都市への流入を助長したのである。都市への流入民は、スラムを形成することとなった。当初は、チグリス川周辺の堤防付近にサリーファ(ṣarīfa)と呼ばれる葦で編んだ家を建てて住んでいたが、61年にサリーファの建設が禁止されて以降、彼らは、政府が低所得者用住居を準備したサウラ地区などに集住することになり、同地区がスラム街として固定化していくなかで「都市内格差」も発生したのである[酒井 1991, 71-79]。

このような状況のなかで、サウラ地区を基盤に勢力を伸ばしたのがイラク共産党であった。1940年代後半のバグダードでは、共産党機関紙の7割がスラム街で配布されていた[Batatu 1978, 607-609]という事実からも、イラク共産党が下層民の動員に力点を置いていたことが浮き彫りになる。都市に流入した者の多くは、19世紀後半以降にシーア派に改宗した南部部族出身であり(註5)、スラムで共産党活動の対象となった者の多くは南部のシーア派出身であった。伝統的なシーア派社会では、ウラマー(‘ulamā’；イスラーム諸学を専門とする知識人)がきわめて大きな力をもっており、世俗的な共産党の拡大は

驚愕すべきことであった。共産党は、バグダードのスラム街に加えて、ナジャフなどのシーア派聖地においてもリクルートを行った。その結果、共産党中央委員会のメンバーの3分の1はシーア派出身者であり、ナジャフの共産党員の多くがウラマーの息子であるか、きわめて近い親戚関係にあるという状況が生まれた[Batatu 1978, 700,752]。イラク共産党は、地方と都市の貧民を支持基盤として、きわめて大きな政治組織に成長し、このことが、社会の世俗化(註6)と合わせて、とりわけシーア派聖地のウラマーの危機感を煽ったことは理の当然であった。ダアワ党創設の社会的な背景には、以上のような状況があったのである。

2. ダアワ党創設のプロセスとその担い手たち

本項では、ダアワ党結成のプロセスとその立役者を分析する。先行研究においては、ダアワ党の創設年に関して諸説あげられており、コンセンサスが得られていない。これらの説は1958年革命前後にわたっているため、単なる年号の相違だけではなく、革命以前かその後かという大きな問題と関わっている。しかし、詳細に検討すると、それらは、いずれも創設期からのメンバーの三つの見解をもとにした三つの説に分類できる。第1の説は、1957年10月12日結成説(サーリフ・アディーブ[Ṣāliḥ al-Adīb]説)である[al-‘Abd Allāh 1997, 17-18; al-Nu‘mānī 1997, 154; ‘Allāwī 1999, 37](註7)。第2の説は、58年革命後の晩夏結成説(ムハンマド・バーキル・ハキーム[Muḥammad Bāqir al-Ḥakīm]説)である[Wiley 1992, 32; Ja‘far 1996, 511; al-Ḥakīm 2000, 227]。そして第3の説は、59年結党説(ターリブ・リファーイー[Ṭālīb al-Rifā‘ī]説)である[al-Ḥusaynī 2005,

68-72]。これらの説は、結成年だけではなく、そのプロセスと担い手をどのように理解するかという問題と密接に関連している。

では、実際はどのようなプロセスで結成されたと考えられるのか。al-Khursān (1999, 48-69), al-Nizārī (1990, 38-41) などの資料を解析するなかで、後のダアワ党の中核を担うウラマーおよび非ウラマーの若手改革者ら^(注8)が、イスラーム政党^(注9)を結成する計画を1956年ころからもっていた、という事実が新たに判明した。彼らが、後にイラクの重要な思想家となる、ハウザで台頭しつつあったサドルにその計画について相談し、同意を得た後に、カーズィミーヤの高位ウラマーであるムルタダー・アスカリー (Murtaḍā al-‘Askarī) に参加を依頼し、サドルら^(注10)が具体的な政党結成について話し合った(表1参照)。結党メンバーが最初に集結したのは、57年のナジャフにおける一連の会合であったが、党の組織が決定したのは58年のカルバラー会合においてであった。さらに、59年にもカルバラーで会合がもたれ、具体的な党の政策が詳細に議論された。

以上からわかることは、上述した3説の相違は、いずれの集会をダアワ党の結成と見なすかの違いであると言えよう。このなかで、結党メンバーによる全体的な議論が初めて行われたという点で、実際に党の出発点としての意味をもったのは1957年10月の一連のナジャフ会合であり、それは当時のシーア派ウラマーの最高権威であるムフスィン・ハキーム (Muḥsin al-Ḥakīm) 家で行われた。

ここで注目すべきことは、ダアワ党が、これらの集会をとおしてハウザおよびマルジャイーヤと調和する政党となることが確認されたことで

ある [al-Khursān 1999, 54]。イスラーム政党結成の計画をもっていた青年たちのなかには、ナジャフで活動していた既存のイスラーム政党であるジャアファリー党 (al-Hizb al-Ja‘farī) の中心人物、アブドゥッサーヒブ・ドゥハイイル (‘Abd al-Ṣāhib Dukhayyil) とサーディク・カームスィー (Ṣādiq al-Qāmūsī), ムスリム青年組織 (Munazzama al-Shabāb al-Muslim) のメンバーであるアディーブが含まれていた。両党は勢力を拡大し得なかったため(後述)、彼らは新たなイスラーム政党を、シーア派宗教界のハウザとの関係を重視して形成しようと尽力した。つまり、政党結成の動きがすでに存在しており、改革派ウラマーであるサドルの同意と後援を得ることによって、最高権威ハキームの保護下で結党が実現したと考えられるのである。

3. ダアワ党創設の社会的・政治的要因

次に、ダアワ党創設の背景となった社会的・政治的要因を分析する。これまでの通説では、イラク共産党の席捲に伴い、ウラマーの影響力が低下することに対する危機感を背景として、サドルの思想的影響下で結党が実現したと論じられてきた^(注11)。先行研究では、それに加えて、スナ派のムスリム同胞団とイスラーム解放党 (Hizb al-Tahrīr al-Islāmī)^(注12)の影響を重視する視点 [Wiley 1992, 31,36], 世俗化によって既得権益を失う、シーア派聖地における商人の積極的な後援活動という論点^(注13)があげられている [Jabar 2003, 105-109]。つまり、シーア派聖地の商人は巡礼や宗教行事を取り仕切っていたが、世俗化の進行により、それらの行事の規模が縮小し、そこから得られる経済的な権益を失うことになった。そこで、イスラームの覚醒を促し、それらの

表 1 ダアワ党初期指導部メンバー（1957～72年）

指導部メンバー	職 業	ムンタダー	創 設	第1期	第2期	備 考
バーキル・サドル (Muḥammad Bāqir al-Ṣadr)	ウラマー	○	○	○		1961年離党
マフディー・ハキーム (Mahdī al-Ḥakīm)	ウラマー	○	○	○		1961年離党
ムルタダー・アスカリー (Murtaḍā al-ʿAskarī)	ウラマー		○	○	○	
バーキル・ハキーム (Muḥammad Bāqir al-Ḥakīm)	ウラマー		○	○		1961年離党
ターリブ・リファーイー (Ṭālib al-Rifāʿī)	ウラマー		○	○	○	
アーリフ・バスリー (ʿArif al-Baṣrī)	ウラマー	○		△	○	第1期不確定
ハシムルウルーム (Muḥammad Baḥr al-ʿUlūm)	ウラマー					1/2期区別不明
ファハルッディーン・アスカリー (Fakhr al-Dīn al-ʿAskarī)	ウラマー				○	
マフディー・サマウィー (Mahdī al-Samāwī)	ウラマー			○	○	
ファドルッラー (Muḥammad Ḥusayn Faḍl Allāh)	ウラマー	○		○		
シャムスッディーン (Mahdī Shams al-Dīn)	ウラマー			○		
ユースフ・タミーミー (Kāzīm Yūsuf Tamīmī)	ウラマー				○	
サーミー・バドリー (Sāmī al-Badrī) *	ウラマー				○	
サーリフ・アディーブ (Ṣāliḥ al-ʿAdīb)	技術者		○	○	○	
スパイティー (Muḥammad Hādī al-Subayṭī)	技術者			△	○	第1期不確定
フサイン・アディーブ (Muḥammad Ḥusayn al-ʿAdīb)	教育管理職					1/2期区別不明
ダーウード・アッターール (Dāwūd al-ʿAṭṭār)	大学教授				○	
ドゥハイル (ʿAbd al-Ṣāhib Dukhayyil)	商 人	○	○	○	○	
ファドリー (ʿAbd al-Hādī al-Faḍlī)	大学教授				○	
アドナーン・バカーア (ʿAdnān al-Bakāʾ)	ナジャフ法学院教授				○	
ハサン・シュッバル (Ḥasan Shubbār)	弁護士	○		△	○	第1期不確定
サーディク・カームスィー (Ṣādiq al-Qāmūsī)	ムンタダー教師	○	○	○	○	
アリー・アッラーウィー (ʿAlī al-ʿAllāwī)						1/2期区別不明
ハーჯジュ・ハダール (al-Ḥājj Khaḍāl)						1/2期区別不明
マラーヤーディー (Ibrāhīm al-Marāyātī)						1/2期区別不明

(注) (1)ムンタダーの欄は、ムンタダー・アン＝ナシュルの出身者を指す。

(2)創設の欄は、創設メンバーを指す。

(3)ダアワ党は、1979年以前はメンバーのリストを作成していないため、すべてを正確に把握することは困難である。

* 1960年代前半にアーリフ・バスリーと対立、離党後イマーム戦士運動 (Ḥaraka Jund al-Imām) を形成した。

(出所) Raʿūf (1999, 9), al-Khursān (1999, 54-63, 67, 90-91, 121-122), Muʾmin (1993, 32-33), Jaʿfar (1996, 511), Jabar (2003, 97-98), Aziz (2002, 231-232), al-Ḥusaynī (2005, 74-75, 86-87) などをもとに筆者作成。

行事を再拡大させるために、ダアワ党結党に献身したという議論である。

もちろん、本節の第1項で確認したように、近代化に伴う社会格差と共産党の拡大は大きな

要因であり、同胞団や解放党の影響、広くはアラブ世界に広がるスンナ派イスラーム運動の影響も看過することはできない。そのことは、党プログラムの類似性^(注13)や構成員の連続性から

も説明がつく。すなわち、後のダアワ党指導部の中心を占めることになる者のなかには、かつての同胞団や解放党のメンバーが少なからず含まれていた^(注14)。また、結党メンバーに商人が含まれていることも事実である。しかしながら、ここでは、政治意識の覚醒と教育機関の役割という二つのより直接的な要因に着目したい。

第1に、政治意識の覚醒であるが、1940年代および50年代のナジャフにおいては、さまざまなイスラーム政党・政治組織が形成された^(注15)。しかし、上述のジャアファリー党やムスリム青年組織は大きな勢力とはなり得なかった。というのは、独自の体系的・包括的イデオロギーをもたない一方で、正統性、すなわちハウザのウラマーの支持がないという弱点があったからである[Mu'min 1993, 31,34; Jabar 2003, 108]。そのため、それらの運動の担い手たちの大半は、新たなイスラーム政党形成に向かうこととなった。ハウザのウラマーの支持がなければ影響力のあるイスラーム運動は作れない、というイラクの社会状況に対する認識が、政治意識と結びついたと考えられるのである^(注16)。シーア派宗教界の重要性に対する認識と、政治意識の高揚の結節点がダアワ党の形成であると言える。

第2に、教育機関であるが、ハウザ内部に改革派が出現し、ハウザの近代化を推進した。その筆頭にあげられるのが、ムハンマド・リダー・ムザッファル(Muḥammad Riḍā al-Muẓaffar)である。彼は、伝統的なマドラサ(madrasa; 主としてイスラーム諸学を教授する教育施設)と、世俗的で西洋的な学校の両方の代替として、1935年に教育機関、ムンタダー・アン＝ナシュル(Muntadā al-Nashr; 公宣協会、以下、ムンタダー)を設立した。近代教育を取り入れた宗教教育を提供する

新たなタイプの教育機関で、高位ムジュタヒド(mujtahid; 独自のイスラーム法解釈を行う能力をもつ法学者)が指導すべきであるとされた^(注17)。サドルやドゥハイイルをはじめとするダアワ党の創設メンバーの半数が、ムンタダーで薫陶を受けた^(注18)。その影響は、メンバー個人だけではなく、組織的構成にも見出すことができる。すなわち、ダアワ党は、党形成計画の段階でムンタダーの内部構造や教育プログラムを参考にしていたのである[al-Khursān 1999, 52]。1920年暴動以降衰退していたイスラーム勢力が、50年代に突如として復興したのではなく、ウラマーの影響力を漸次的に拡大するような動きが、着実に広がっていたと考えるべきである。

ここで重要なのは、既存のイスラーム政党・政治組織にムンタダーの出身者が含まれているということからわかるように、第1と第2の要因が密接に結びついていたということである。すなわち、政治意識の覚醒と教育機関の影響が相互補完的に結党へとつながったのである。

II ダアワ党の理念とシーア派宗教界

本節では、サドルの政治思想の解析をとおしてダアワ党の理念を瞥見し、党とシーア派宗教界の関係を分析するなかで、ダアワ党の理念・活動の枠組みを作っているのはシーア派宗教界との関係である、ということを明らかにする。

1. ダアワ党の理念

ダアワ党はどのような理念を掲げた政党であったのだろうか。ダアワ党を包括的に理解するために、党の理念を検討しておこう。そのために、党のプログラム、特に法学面のそれを作り、党の

学習文章となった『イスラームの基礎 (al-Usus al-Islāmīya)』を執筆したサドルの政治思想を解析することにする [al-Khursān 1999, 68,94] (注19)。

まず、イスラームにおいて、しばしば否定的に語られる「党」(ḥizb) という名称をあえて採用し、政党という形態でイスラーム運動を展開した理由について考えたい。それ以前は、「党」は分裂を助長するものとして政治組織につけられることは少なかった。

ダアワ党の名称と形態を論じた論考の冒頭で、ダアワ (da'wa ; 呼びかけ・布教) という名前を掲げることにについて「イスラームのダアワという名称は、我々の任務をごく自然に表現した名称であり、人々にイスラームを呼びかける (da'wa) という我々の責務を、イスラーム法に則して言い表している。…… [中略] ……それゆえに、我らは神の党 (ḥizb Allāh) であり、神の支援者 (anṣār Allāh) である。……我々の任務は、イスラームを広めることにほかならない。」 [al-Ṣadr 2005a, 716], とサドルは言う。その上で、政党という形態をとった理由については、以下のように論じている。

「我々がダアワを行うなかで選択した組織形態 [政党] は、イスラームを広めるという公益にとって必要な事柄を考慮に入れ、現代のさまざまな [政治] 組織のなかで支配的な形態を発展させたものである。……この形態がイスラーム法に照らし合わせて正統性をもつかという問題については、……ダアワが採用する方法・形態が法的に禁止された事柄を含まない限り、……いかなる有益な方法に従うことも、法的に許可されているのである。」 [al-Ṣadr 2005a, 716]

サドルは、政党という形態をとることはイスラーム法的に許可されていると主張するだけで

はなく、「イスラームのために努力を集結し、……その組織化のための最良の方法を選択することは……義務なのである」 [al-Ṣadr 2005a, 716], と論じている。さらに、当時のイラク社会の状況を鑑みると、イスラームのダアワは革命的 (inqilābī) でなければならないとする [al-Ṣadr 2005c, 713]。

小杉 (2006, 588-589) によると、伝統的なイスラーム国家論では、ヒズブ (ḥizb) という語は、ファクション (徒党) や党派を意味し、分裂主義を連想するものとして否定的に語られた。それは、①初期イスラームの理想が諸宗派、党派の分裂によって失われたこと、②伝統的なイスラーム法学が対象としたのが「統治の諸規則」であり、民衆の政治参加ではなかったこと、などに起因する。

それにもかかわらず、サドルが政党という名称・形態を採用した理由は、第1に、当時のイラクにおいて、イラク共産党に代表される組織政党が体系だった活動を通じて勢力を伸張するなかで、それらに影響を受けたこと、第2に、脱イスラーム化が進行する社会に対してイスラームを広めるためには、イスラームに立脚し、政治に積極的に関わる組織を形成することが不可欠であったこと (注20)、などに求められよう。サドルは、この意味で政党をイスラームを広めるための政治組織と考え、政党を自称することはイスラーム法的に合法であると主張したのである。また、イスラームを広めるという目標をもつがゆえに「神の党」(注21) であると論じることにより、党がもつ否定的なイメージを払拭した。

ダアワ党は、シーア派・スンナ派の区別なく、イスラーム全般を視野に入れていた。そのこと

はサドルが著した『イスラームの基礎』^(注22)からも明らかである。イスラームは、思想的基盤と社会体制の双方を全人類に提供する、ということをも前提に論を展開しているからである[al-Ṣadr 2005b, 694]。そしてこうした前提は、サドルの国家論ないしは世界観をも規定している。彼は、既存の国家を、①イスラームとは別の共産主義などに立脚した国家、②立脚する特定の思想はもたないが、イスラームの原則によって動いているわけでもない国家、③イスラーム国家、という三つに分類し、それぞれ個別の対応を検討している。すなわち、①と②に対しては次のように述べ、その変革ないしは転換を主張する。

「統治には2形態しかない。イスラームの統治と、不信仰とジャーヒリーヤ〔無明〕の統治である。……イスラームの法規定によれば、後者は、合法的な国家ではなく、ムスリムたちはそれを廃棄してイスラーム国家と代替する義務を負っている。ただし、肯定的結果〔革命の成功〕が予想されないときは、信徒たちを危険にさらす行動を行うべきではない。」[al-Ṣadr 2005b, 698-699]

一方、③に関しては、「このようなイスラームの統治に対しては、従順が義務であり、統治権力がその資格において発する命令や決定に背くことは許されない。」[al-Ṣadr 2005b, 699]、としている。イスラームの統治に立脚した国家の建設を謳うサドルの主張からもわかるように、ダアワ党は、イスラーム国家の建設をイデオロギー的基軸とした。これは、共産主義や民族主義がイラク社会に伸張するなかで、イスラームに立脚した国家のあり方を模索したものである。

それでは、ダアワ党が建設することを目指し

たイスラーム国家とは、いかなるものか。『イスラームの基礎』によると、イスラーム国家は、「〔第1次大戦後に国境画定された既存の〕領域国家」(al-dawla al-ʿiqli-mīya)と「民族〔主義に依拠した〕国家」(al-dawla al-qawmīya)に對置される「思想的國家」(al-dawla al-fikrīya)とされる。これは、特定の領域に限定した既存の国民国家や、アラブ民族に立脚した統一アラブ国家を否定し、第3項としてイスラーム国家を目指すものである。つまり、特定の思想の統合性に依拠した国家であるため、自ら境界を認めることは、思想的境界のほかはあり得ないというのである[al-Ṣadr 2005b, 702]。ここには汎イスラーム主義の傾向が認められる。では、イスラーム国家はどのように統治されるべきなのか。ダアワ党の学習文書である『イスラームの基礎』においては、具体的な方法は詳述されていないものの、その概要は把握することができる。まず、イスラーム国家における統治とは、「イスラーム法に従って、ウンマ〔イスラーム共同体〕の諸事を管理すること」と定義づけられ、預言者や諸イマームなど無謬の指導者が不在である現在では、確立すべきイスラーム統治の形態として、「シェーラー」(協議)と「ウンマの統治」(ḥukm al-umma)^(注23)があげられている[al-Ṣadr 2005b, 704-706]。つまり、イスラーム法の枠組みで、シェーラーによる統治に立脚してイスラーム国家を運営するということである。

それでは、その「イスラーム的統治」(al-ḥukm al-islāmī)の目的は何か。『イスラームの基礎』によると、統治形態と統治機関のあり方が、①イスラーム法の諸規定を遵守していること、②イスラームの公益^(注24)と最大限合致していること、③ムスリムたちの公益と最大限合致してい

ること、である [al-Ṣadr 2005b, 707]。そのためには、ウンマの「イスラーム意識」(al-wa'y li-l-islām) (注25) と、ウンマがもつ社会的・国際的状況の現状認識が不可欠であるとされる。ここで重要なのは、「ウンマにおいて上記の条件が満たされない場合は、ダアワ党は、ウンマ内でいかなる統治形態を選択すべきかについて協議できるときまで、イスラーム的統治形態をウンマに確立し、統治機関を選択する責務を負う。というのは、ダアワ党がイスラームの規定とその公益に精通し、ウンマの状況とその公益を十分認識しているウンマの前衛 (ṭalī'a) だからである」[al-Ṣadr 2005b, 707]、ということである。つまり、ダアワ党は、イスラームに覚醒した前衛を自認し、世俗化が進行する社会を前に、イスラームの再拡大を進める指導的立場にあると位置づけたのである。その上でダアワ党は、①思想と変革の準備、②政治の組織化、③革命の実行、続いて④革命政権の統治、という四つの段階を経てイスラーム国家の建設を目指すというプログラムを提示した (注26)。

2. 党理念と活動を規定するもの：ハウザ、マルジャイーヤとの関係

以上のような理念を掲げるダアワ党は、第Ⅰ節の第2項で確認したように、シーア派宗教界との関係を軸に形成された (注27)。それでは、1950年代と60年代のイラクにおけるシーア派宗教界は、どのような状況であったのだろうか。

当時のイラク、とりわけナジャフのハウザにおいては、「改新派」(tajdīdī) と「伝統派」(taqlīdī) の二つの潮流が拮抗していた [Ra'ūf 2002, 103]。ハウザとは、法学者の学界であり、いくつもの学閥が存在するが、政治・社会に対するそれぞ

れの学閥の考え方には相違がみられる。そのハウザの頂点に立つのがマルジャア・アッ=タクリード (marja' al-taqlīd) であり、その地位は学問的蓄積の多寡に依拠している。なお、シーア派の最高権威を意味するマルジャイーヤは、マルジャア・アッ=タクリードの地位・権威を指す。

ハウザにおいて、改新派は、イラク社会と政治への影響力を拡大するために、ウラマーの組織化を推進した。1959/60年にナジャフ・ウラマー協会 (Jamā'a al-'Ulamā' fi al-Najaf al-Ashraf) が結成され、64年にはバグダード・カーズィミーヤ・ウラマー協会 (Jamā'a al-'Ulamā' fi Baghdād wa al-Kāzīmīya) が創設された。前者の中心となったのは、サドルの親戚の高位ムジュタヒドであるムルタダー・アール・ヤースィーン (Murtaḍā Āl Yāsīn) であった。サドルは彼と自らの長兄の支持を得て、同協会に影響力を行使していた [Faḍl Allāh 1982, 16]。ダアワ党員となったウラマーは、ほぼすべてが同協会のメンバーであった (注28)。そのなかで、サドルや、現在ヒズブッラー (Ḥizb Allāh) の精神的指導者であるムハンマド・フサイン・ファドルッラー (Muḥammad Ḥusayn Faḍl Allāh) が中心となって『アドワー (al-'Adwā', 光焰)』誌を編集し、イスラームの覚醒を呼びかけていた。後者の中核メンバーの多くもダアワ党員であり (注29)、執行委員会 (al-Hay'a al-Tanfīdhīya) をバグダード・カーズィミーヤ・ウラマー協会内に発足させ、64年に施行された銀行や大工場などの国有化に反対するなど、政治的な活動を活発に行っていた [al-Ḥakīm 2000, 243-244 ; al-Khursān 1999, 146]。なお、最高権威のムフスィン・ハキームもこれらの協会の活動を容認していた (注30)。

これに対し、伝統派に目を向けると、彼らは改

新派の活動にきわめて批判的であった。当時のハウザでは、ウラマーが政治に介入することは適切ではないという認識が、伝統派のなかでとりわけ強かった [Ja'far 1996, 474]。サドルは『アドワー』誌のなかに「我々の使命 (*Risālatu nā*)」という論考を連載していたが、それが高位ウラマーの意見を反映したものではないという理由で批判され、その連載は中止された [Sankari 2005, 108-109]。とりわけ批判が集中したのは、ハウザのウラマーが政治活動を行っているという点であった。そのため、ムフスィン・ハキームはサドルに圧力をかけ、その結果、サドルは1961年にダアワ党を離党することとなった。ハキームの2人の息子、マフディー (Mahdī al-Ḥakīm) とバーキル (Muḥammad Bāqir al-Ḥakīm) も同様の経緯で離党した [al-Ḥusaynī 2005, 99-115]。

以上のようなシーア派宗教界の状況のなかで、サドルはハウザとマルジャイーヤの改革を主要な目的のひとつに掲げた [Ja'far 1996, 474-475]。これは、ムザッファルの改革の流れをくむものであると言える。その改革によって成立したムンタダーは、上述のように、伝統的なイスラーム教育の近代化を目指すという側面を強くもっていた。サドルもまた、ハウザとマルジャイーヤの近代化を模索していたのである [Aziz 1993, 210]。

サドルはシーア派宗教界の近代化に取り組むなかで、ハウザを有効にイスラーム運動と融合させようとした。その最も顕著な例が、上述の二つのウラマー協会における活動であった。1950年代から政党・マルジャイーヤの連帯関係を構築しようとする動きが生まれたという指摘 [Ra'ūf 2000, 69] は、このようなサドルとダアワ党、ウラマー協会の活動を的確に言い表してい

る。すなわち、サドルはシーア派宗教界の近代化と政治化を目指し、その結果、ダアワ党と有機的連帯関係を構築しようと尽力したのである。離党後にも、ダアワ党指導部との会合において、サドルは以下のように述べている。

「私は現在、イスラーム運動^(注31)は、マルジャイーヤの支援なしでは求められた役割を果たすことはできないと考えている。同様に、……マルジャイーヤにとっても運動は不可欠であり、マルジャイーヤの使命は運動なくしては達成できない。……マルジャイーヤと運動との間は、あの不正者たち [バアス政権] が [我々を分裂させることが] できないように、精緻に調整を行うことが必須事項なのである。」 [Mu'min 1993, 125-126]

すなわち、ハウザとダアワ党は相互補完的な関係にあり、協力体制をさらに強化すべきであると、サドルが強調しているのである。以上からわかることは、サドルがハウザとダアワ党の連帯を重視していること、ダアワ党もそれに合意するかたちで、ウラマー協会をとおしてハウザの枠組みのなかで活動し、ハウザのウラマーの決定を必要としたことである [Mu'min 1993, 50, 96]。つまり、ダアワ党の理念と活動を規定しているのは、シーア派宗教界であり、それと連携する必要性にほかならない。

近代的で組織化された政党形態をとるダアワ党は、イスラームの拡張を第一義的な目標に掲げた。そして、ハウザとマルジャイーヤの改革を目指したサドルの意向と合致するかたちで、ハウザと連帯した政党活動を構築しようとしたのである。

Ⅲ ダアワ党指導部とその変遷

1961年のサドルら^(注32)の離党に伴い、党指導部が再編されることになる。Wiley (1992)によると、この再編によって、ダアワ党の指導部がウラマー層から非ウラマー層へシフトし、非ウラマーの影響力が拡大した。そこで本節では、サドルが直接党を指導した1957年から61年までの4年間を第1期、サドル離党後の62年から72年にかけての10年間を第2期とし、各時期における党指導部のメンバー構成と組織・活動の分析をとおして、党がハウザとの関係においてどのような変化をとげたのか、実証的に検証する。ダアワ党は、再編当初は、比較的自由な政治空間で勢力を拡大した。この時期は、シーア派イスラーム運動の黄金期であると指摘されている[Marr 2004, 128]。しかし、68年のバース党政権成立後、ダアワ党に対する弾圧が激化し、指導部の主要メンバーが多数国外への避難を余儀なくされた。その結果、72年にイラク国内の指導部構成が大きく変化し、ダアワ党は新たな局面を迎えることになる。

1. 第1期

第1期そのものを分析する前に、まず、二つの期間に共通する党指導部のメンバーについて、若干の考察を加える。

表1は、先行研究、およびアラビア語資料のなかで言及されている指導部の主要メンバーをリスト化したものである。ここから読みとれることは、以下の2点である。第1に、Wiley (1992, 94-95)が強調するように、非ウラマーの知識人層が一定数占めていることは確認される

が、それにもかかわらず、ウラマーが多数派であることがわかる。つまり、このリストからは、1972年までのダアワ党は、指導部の構成をみるかぎり、非ウラマーが多数派であったとは言えない、ということである。

第2に、創設メンバーに確認されたように、ムンタダーの出身者が複数名存在するということである。同教育機関出身者には、非ウラマー層とウラマー層が共に入っていることが重要である。双方共に、ハウザ改新派から薫陶を受けていたと考えられる。とりわけ、ナジャフの商人であるドゥハイイルが、ウラマーの代理としてフムス(khums；5分の1税)の回収に従事していたことは注目に値しよう。彼は大部族連合であるシャンマル族出身で、ナジャフのウラマーときわめて強い関係をもっていた[Ra'ûf 2002, 213]^(注33)。また、創設メンバーの1人であるカームースィーは、ムンタダーで教鞭をとっており、ハウザ内の改新派と緊密な関係にあった。すなわち、ダアワ党の中核部を占めるのは、非ウラマーのなかでもハウザとなんらかのつながりをもっている者が多いと考えられよう。

さて、以上のような指導部のメンバー構成に関する共通点を踏まえた上で、第1期におけるダアワ党の組織形態と活動を概観すると、シーア派宗教界と密接な関係をもつ組織を形成したという特徴を見い出すことができる。

1958年の最初期においては、ハルカ(halqa；細胞)を単位に組織化が行われた。そのハルカが結合して、ナジャフ、カルバラー、バグダード、バスラに支部の原型が設置された[al-Khursān 1999, 89-91]。図1からもわかるように、思想や組織化などを指導する部署が複数置かれたが、そのなかでもとりわけ重要なのは、「マルジャイ

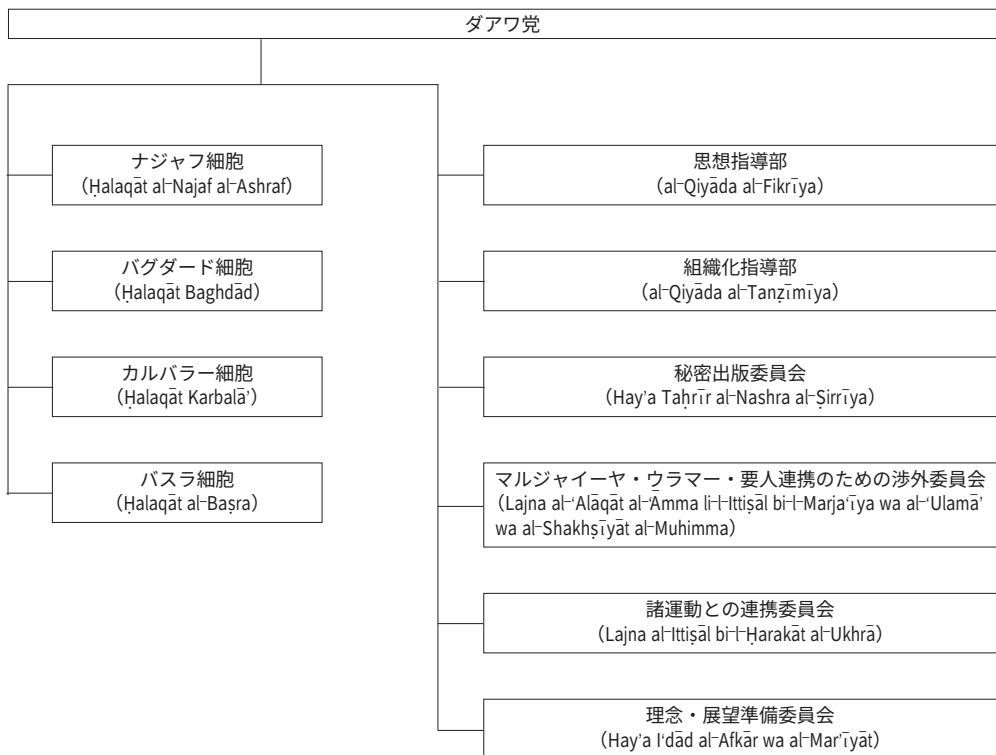
ーヤ・ウラマー・要人連携のための渉外委員会 (Lajna al-'Alāqāt al-'Āmma li-l-Ittiṣāl bi-l-Marja'īya wa al-'Ulamā' wa al-Shakhṣiyāt al-Muhimma)」が設けられているということである。この委員会の中心人物は、アスカリー、マフディー・ハキーム、ドゥハイイルであり、ハウザと強い関係を築いた者たちを主要な担い手として構成されている [al-Ḥusaynī 2005, 86-87]。また、第1期の活動のなかで最も特筆すべきナジャフ・カルバラーにおける年間2回の党大会でも、マルジャイーヤ、および共産党との関係について議論が繰

り返された [al-Khursān 1999, 128]。以上から明らかに、第1期のダアワ党は、組織面においてもハウザ、マルジャイーヤと深い関係を保っており、58年以降の比較的自由な政治空間のなかで勢力を拡大していくことになる^(注34)。

2. 第2期

すでに述べたように、1961年のサドルらの離党によって、ダアワ党は指導部を再構成した。本項では、まず、再編された指導部のなかでも、アスカリーとドゥハイイルの役割に焦点を当

図1 1961年までのダアワ党組織図



(出所) al-Khursān (1999, 89-93), al-Ḥusaynī (2005, 85-86) などをもとに筆者作成。

て、次に、再編後の組織と活動を概観したい。

指導部再編の後、ダアワ党の最高指導者(党首に相当)の地位についたのは、高位ウラマーのアスカリーであった。彼は、サドル離党後の混乱を收拾した後、1963年には最高指導者の席を譲位し、エンジニアのムハンマド・ハーディー・スパイティー(Muḥammad Hādī al-Subaytī)を党の最高指導者に任命した。こうして、党の実際の指導者は、サドル離党後の2年後に非ウラマー層に移ったが、第2期指導部にも多数のウラマーが存在する(表1参照)ことからわかるように、アスカリーをはじめとする党内ウラマーの影響力は無視できない。実際、アスカリーは最高指導者職を去った後も、党の高位ウラマーとして党を指導する立場にあった[al-Khursān 1999, 135]。さらに、61年の指導部再編によって党ナンバー2の地位に台頭したドゥハイイルの役割に注目すると、彼の重要な任務が、サドルとの連絡であり[Mu'min 1993, 52]、党は組織的にサドルの下へ連絡係を派遣していたということがわかる[al-Ḥusaynī 2005, 115]。

以上のように、形式的には指導者が非ウラマーにシフトしたが、党内でウラマーが影響力を行使していたこと、党外のハウザとの連携関係を保つ役割が存在したことを勘案すると、指導部においてウラマーの影響が薄れ、指導権がすべて非ウラマー層の手中に移ったと結論づけることは早計であると言わざるを得ない。

次に、指導部再編後の組織形態と活動について瞥見する。この時期の特徴は、組織化がさらに進んだことである。図2からは、組織化委員会を中心にバグダード、カーズィミーヤ、バスラ、ナジャフ、中部・ユーフラテス川畔、北部がそれぞれ統括されたことがわかる。第1期

からの主要な指導者たちが各委員会の責任者を務めたが^(注35)、なかでもドゥハイイルは、さまざまな委員会を総括する地位にあり、組織化に大きく貢献したと言えよう。同党は委員会が増設され、組織的な政党に成長したのである。

この時期のダアワ党の重要な活動としては、主に以下の三つをあげることができる。すなわち、第1に1961年、もしくは63年に『ダアワの声(Ṣawt al-Da'wa)』誌を刊行し、同誌を通じてダアワ党は、ハウザとの連携に基づいた政治活動と、イスラーム拡大の必要性を党内外に強調した^(注36)。第2にバグダードに神学院(Kullīya Uṣūl al-Dīn)を創設したことである。同学院は、1964/65年に創設され、サドルの支援を受けて、アスカリーが主導的な役割を果たした^(注37)。ハウザと近代的な大学をつなぐ役割を担うために、58年にナジャフに建設された法学学院(Kullīya al-Fiqh)^(注38)と合わせて、ダアワ党のリクルートの中心地となった[Mu'min 1993, 41-42]。そして第3に、ナジャフ・ウラマー協会のほぼすべての活動に参加した。この点に関しては、同協会の活発なメンバーの大半がダアワ党员であったという指摘もある[al-Khursān 1999, 102, 160]。

一方、ハウザ側からのアプローチとしては、サドルがナジャフのハウザから知識人や学生を選抜してダアワ党に送り込んでいた^(注39)。すなわち、ハウザ側からサドルが、党側からアスカリーが中心となり、ダアワ党とハウザの橋渡しをしていたのである[al-Khursān 1999, 135, 148]。付言すれば、党最高指導者のスパイティーもまた、イスラーム運動におけるマルジャイーヤの重要性に理解を示していた[al-Khursān 1999, 161]。

以上のことから、サドルが離党し、指導部の体制が変化した後も、党内にウラマーが影響力

図 2 1972年までのダアワ党組織図



(出所) al-Khursān (1999, 127-138) をもとに筆者作成。

を行使し、ハウザとマルジャイーヤとの関係を重視した活動を行っていたことが明らかになった。第2期においては、ダアワ党の組織化がさらに進行し、ハウザ、マルジャイーヤと協調した活動を背景に党勢を拡大した〔al-Khursān 1999, 106〕、ということは看過できないのである。

しかし、1968年にバース党政権が成立すると、ダアワ党をめぐる政治状況は一変した。同政権は、69年に「マルジャイーヤは、バース党と革命の最大の障害である」とする見解を表明し〔Mu'min 1993, 91〕、強大な影響力を保持していたムフシン・ハキームの死去（1970年）を契機にダアワ党の弾圧を本格化させた^{（注40）}。ここで政権は、ダアワ党がハウザと協力して活動を活発化させることを危惧し、両者を分裂させることに力を注いだのである〔Mu'min 1993, 109〕。すなわち同政権は、ハウザ側に対しては、クーファ大学の開鎖、学生の徴兵、聖地のモスクに隣接するマドラサへの弾圧などを行い、ダアワ党に対しては、多くの幹部を逮捕し、71年のドゥハイイルの処刑を嚆矢に、中核組織に壊滅的打撃を与えた〔al-Khursān 1999, 157, 175-178〕。

約言すると、ダアワ党は、バース党政権成立までは、シーア派宗教界と連動したイスラーム覚醒の拡張、大衆のイスラーム化をイデオロギー的基軸としていたが〔al-Khursān 1999, 133〕、ダアワ党に対する弾圧が強化されることによって、両者の関係に齟齬が生じたということができよう。つまり、これまで論じられてきたように、1961年のサドルの離党に伴う指導部の再編によって、ダアワ党とハウザの間に亀裂が入ったのではなく、問題の契機は68年のバース党政権の成立と弾圧の強化に求められるのである。

おわりに

以上でみてきたように、ダアワ党は、活発な政党活動が繰り広げられる政治空間のなかで、1958年の共和国革命後に創設された。その背景には、急激な近代化に伴って典型的な都市集中型社会へと移行しつつあるイラク社会の矛盾があった。このような状況のなかで、イラク共産党を筆頭に勢力を拡大する世俗主義政党に対する、イスラーム勢力からの対応が新たなイスラーム政党の結成であった。ハウザと強い関係をもつ非ウラマー層が、改新派ウラマーやサドルとともに立案し、ダアワ党を作り上げた。そこには、ムスリム同胞団とイスラーム解放党に加えて、ナジャフを中心に活動を行っていたイスラーム諸政党・政治組織とムンタダーの強い影響が確認される。政治意識の覚醒と、シーア派宗教界の重要性に対する認識の結節点がダアワ党の形成であると言えよう。

ダアワ党は、イスラームの拡大とイスラーム国家の形成を第一義的な目標に掲げ、自らをその前衛に位置づけて活動を開始した。とりわけ重視されたのが、ハウザおよびマルジャイーヤとの関係である。サドルが明確に述べているように、ダアワ党は、ハウザと連携した政党活動を行うことを目指した。1961年のサドル離党による指導部の再編の前後を比較し、メンバーと組織形態・活動を詳細に分析すると、指導部が表面上は非ウラマー層にシフトしたにもかかわらず、実際はウラマーが影響力を行使し、また、ハウザとの連帯を担う組織が存在し、ハウザと協調関係を継続させるような活動を行っていたことが明らかになった。ダアワ党拡大の背景に

は、シーア派宗教界との協調関係があったのである。

しかしながら、その後、両者の関係は変化する。バース党政権の成立後、ダアワ党に対する弾圧が本格化し、ハウザとダアワ党の関係を分断する政策が採用されたからである。つまり、初期においては、ダアワ党とシーア派宗教界は協調関係にあり、その良好な関係に変化が訪れるのは、1961年の指導部再編後ではなく、68年のバース党政権成立と弾圧の激化以降であった。これ以降、ダアワ党は新たな局面を迎えることになる。

以上に明らかになった政治政党としてのダアワ党とシーア派宗教界の関係は、現代のイラク政治を考える上で、重要なひとつのカギとなろう。それは、ダアワ党がシーア派宗教界との関係を重視しながら党勢を拡大した時期のイラクにおいても、冒頭で取り上げたような現在のイラク政治においても同様である。今後、両者の動態的な関係を、詳細に検証していくことが課題となる。

(注1) 現在のイラクにおいて、シーア派宗教界の動向を十分に考慮に入れているのはダアワ党のみではなく、イラク・イスラーム革命最高評議会 (al-Majlis al-'Alā li-l-Thawra al-Islāmīya fī al-'Irāq) などと同様である。これは、現代イラクにおけるシーア派宗教界の重要性の証左となろうが、まさにこのような政党と宗教界の関係を初めて体系的に構築したのがダアワ党である、ということが本稿の主旨である。

(注2) ダアワ党の党史を、「成立期」(1957～72年)、「政治・革命運動期」(1973～79年)、「分裂・亡命期」(1980～2003年)、「政権参画期」(2004年～)に分類する。「成立期」は指導部や組織が形成され、党勢を拡大した期間であり、「政治・革命運動期」には政治活

動・デモが活発化し、党に対する弾圧が強化されたことから武装化が進行した。とりわけ1977年以降は、アーシューラー ('āshūrā'; ヒジュラ暦ムハッラム月10日に行われる、12イマーム派の第3代イマーム、フサインの殉教を哀悼する行事)の際に発生した大規模な反政府暴動であるサファル蜂起 (Intifāda Ṣafar) を契機に、武装闘争が激化した。「分裂・亡命期」には、80年のサドル処刑後、党指導部がすべてイラク国外に亡命を余儀なくされ、テヘラン、ダマスカス、ロンドンに指導部が分裂することになる。イラク戦争後の2004年以降は、政権に参加して主導権をとる「政権参画期」である。

(注3) サイド首相率いる憲法統一党 (Hizb al-Ittihad al-Dustūrī) は、過半数は獲得できなかったものの、最大の56議席を得た [Shubbar 1989, 237]。

(注4) 1954年選挙から58年の革命に至る経緯については、Shubbar (1989, 232-251) を参照のこと。重要なことは、自由将校団最高評議会 (al-Lajna al-'Ulyā li-l-Ḍubbāṭ al-Aḥrār) と、統一国民戦線加入の各政党から1名の代表で形成される国民最高評議会 (al-Lajna al-Waṭanī al-'Ulyā) が連帯して革命を担ったということである。

(注5) イラクにおいて、シーア派が多数派になったのは19世紀後半以降のことにすぎない。それは、ナジャフのムジュタヒドが南部部族・部族連合をシーア派に改宗させたことに起因する。改宗のプロセスや、ムジュタヒドと部族の利害関係の合致については、Nakash (1994, 25-47) を参照。

(注6) 本稿では世俗化を、宗教の私事化というよりはむしろ、「宗教的信仰、および宗教的組織の政治的・社会的重要性の低下」という意味で用いる。

(注7) カーズィム・ハーイリー (Kāzīm al-Ḥā'irī) の説も同様。

(注8) 具体的には、マフディー・ハキーム、ドゥハイイル、カームスィー、リファアーイー、アディーブ。Mu'min (1993, 32-33), Sankari (2005, 74-75), 表1もあわせて参照のこと。

(注9) 本稿ではイスラーム政党に、小杉 (2006, 555) の定義を援用し、「イスラームに思想的基盤を置く政治イデオロギーに立脚する政党」と定義づけることとする。小杉は、イスラーム政党であるか否かの基準を、①政党と自己規定する政治組織であること、②公然となんらかのかたちで「政治へのイスラームの適用」

を実現すべき目標に掲げていること、の2点にまどめていいる [小杉 2006, 551]。

(注 10) 具体的には、サドル、マフディー・ハキーム、アディーブの3名。

(注 11) この通説を紹介したものとして、Wiley (1992, 31)、酒井 (1997, 55) などがある。

(注 12) イラクのムスリム同胞団は、1948年にモスルで組織化され、60年に政党として公認された。その後、ムハンマド・ファルジュ・サーマッラーイー (Muḥammad Farj al-Sāmarrā'ī) を中心に拡大。ムスリム同胞団をベースに組織化されたイラク・イスラーム党 (al-Hizb al-Islāmī al-'Irāqī) は、現在も活動が続けている。イスラーム解放党は、52年にエルサレムで成立後、イラクに拡大、54年、58年、60年に政党申請を却下され、さらに、そのエリート主義的性格に支持が集まらず、勢力を拡大し得なかった。

(注 13) プログラムの類似性については、Jabar (2003, 81-82) を参照。

(注 14) 元同胞団員は、同胞団の幹部であったアスカリー、元解放党員はマフディー・ハキームやバーキル・ハキーム、アーリフ・バスリー、アスカリー、ハーデイー・スパイティーなどがいた [Sankari 2005, 85 ; al-Khursān 1999, 39-41]。

(注 15) 具体的には、1940年にナジャフで結成され、51年より活動を活発化させたムスリム青年組織、54年に結成されたムスリム信仰組織 (Munazzama al-Muslimīn al-'Aqā'idīn)、57年にナジャフの商人を中心に結成された教義・信仰青年 (Shabāb al-'Aqīdawa al-Imān)、52年にナジャフで結成されたジャアファリー党などがある。

(注 16) ドゥハイイル、カームスィー、シュッバルはジャアファリー党形成にあたり、改革派ウラマーに計画を打診したが、同情のみで協力はなかった。そのため、ハウザの支持を得ることなく結党に踏みきった。つまり、ダアワ党創設以前からハウザの重要性への十分な認識と高い政治意識が存在していたと考えられる [Shubbar 1990, 367]。

(注 17) 当時の有力な改革派ムジュタヒドのムハンマド・フサイン・カーシフルギター (Muḥammad Ḥusayn Kāshif al-Ghiṭā') は、これこそがムジュタヒドの担うべき仕事であると認識していた [Nakash 1994, 263-267]。

(注 18) ムンタダーの出身者は以下のとおりである。サ

ドル、カーズィム・ハーイリー、ヌウマーニー (サドルの第1の側近) (以上、カーズィミーヤのムンタダー) [al-Nu'mānī 2003 Vol.1, 53,55], ドゥハイイル, シュッバル, カームスィー, ファドルッラー, バスリー, マフディー・アースィフィー (Mahdī al-'Aṣīfī) (以上、ナジャフのムンタダー) [Sankari 2005, 66,85]。表1もあわせて参照のこと。

(注 19) サドルの最も近い弟子であるマフムード・ハーシミー (Maḥmūd al-Hāshimī) によると、思想的諸側面と思想的なテーマの95%はサドルの著作と思想に立脚している [al-Ḥusaynī 1989, 231]。

(注 20) この意味で、ダアワ党は、強いイデオロギーをもつ「プログラム政党」 [岡沢 1988, 41-42] であった。

(注 21) この「神の党」 (ḥizb Allāh) は、クルアーンの一節 (第5章第56節) に由来し、ムスリム全体を意味するため、分裂という否定的なイメージはない。レバノンのヒズブッラー (Ḥizb Allāh) の名称も、このクルアーンの節に基づいている。

(注 22) 『イスラームの基礎』については、すでに翻訳がある。本稿では、訳出にあたりサドル (1992) を適宜参考にした。同文章は長期にわたりダアワ党の秘密文章となっており、党外に出たのは、後年に、イラク国外で出版されたのが初めてである [al-Ḥusaynī 2005, 19]。

(注 23) サドルは、ウンマの統治を、シュラーによって物事を決定するという意味で用いている。

(注 24) サドルによると、イスラームの公益とは、イスラームを普遍的に呼びかけること、かつ国家の基礎であるイスラームにとって好ましい状況を作り上げることである [al-Ṣadr 2005b, 707]。

(注 25) サドルは、イスラーム法に立脚した生活を送り、またイスラーム法に立脚した政治・社会を構築しようとする意識をイスラーム意識と呼んでいる。

(注 26) 変革 (taghyīrī), 政治 (siyāsī), 革命 (thawrī), 統治 (ḥukmī) の段階を進むものとされた [al-Khursān 1999, 555-559]。

(注 27) しかしながら、初期ダアワ党は、シーア派に限定されず、イスラーム全般を対象としたものであったことに注意が必要である [Sakai 2001]。

(注 28) ダアワ党とナジャフ・ウラマー協会の共通メンバーについては、Jabar (2003, 111-112), al-Ḥusaynī (2005, 148-151) を参照のこと。

(注 29) バグダード・カーズィミーヤ・ウラマー協会の主

要メンバーについては、al-Ḥakīm (2000, 281-282) がきわめて詳細なデータを提供している。

(注30) ハウザにおいては、ムフスィン・ハキームの意向に反する活動を行うことがほぼ不可能であったと考えられる。ムフスィン・ハキームとダアワ党は協力関係にあったという指摘もある [Allāwī 1999, 42-43]。

(注31) このなかで、サドルが用いている「イスラーム運動」(al-ḥaraka al-Islāmīya), 「運動」(ḥaraka) という言葉は、いずれもダアワ党を指すものである。

(注32) 1961年に離党したのは、サドル、マフディー・ハキーム、バーキル・ハキームである。

(注33) ドゥハイイルは、ムフスィン・ハキームの2人の息子と緊密な関係にあり、サドルとその兄とは弟子のような関係であった [al-Nizārī 1990, 19, 37, 49-50]。

(注34) 1963年時点でダアワ党のメンバーは約400人であったとされる [al-Khursān 1999, 128]。

(注35) バグダードではアスカリーとバスリーが、カーズィミーヤではドゥハイイルが、北部ではシュッパルがそれぞれ責任者として活動していた [al-Khursān 1999, 129-131]。

(注36) 同誌の概要と出版年については、Jabar (2003, 89-94) を参照のこと。

(注37) 同神学院は、1958年にアスカリーが設立したイスラーム善行基金協会 (Jam'īya al-Ṣundūq al-Khayr al-Islāmī) を基に設立された。他にもダアワ党が関わった協会は、イスラーム相互扶助協会 (Jam'īya al-Taḍāmun al-Islāmī) など多数存在 [Mu'min 1993, 74-76]。

(注38) ムンタダーの高等教育版として、ムザッファルが設立した [Mu'min 1993, 41; Sankari 2005, 85]。

(注39) サドルは、ナジャフ、カルバラーのハウザから学生をダアワ党にリクルートしていた [Aziz 2002, 232]。バーキル・ナースィリー (Muḥammad Bāqir al-Nāṣirī), イブラーヒーム・アンサーリー (Muḥammad Ibrāhīm al-Anṣārī) がその主要な人物である [al-Ḥusaynī 2005, 83]。

(注40) ムフスィン・ハキームの存命中は、ハウザとダアワ党への弾圧は、同師を支持するムスリムの反発を恐れて、限定的なものであった [al-Khursān 1999, 172]。

(本研究においては東京外国語大学の酒井啓子教授に多大なご指導をいただいた。深謝申し上げます。)

【文献リスト】

〈日本語文献〉

岡沢憲美1988.『政党』(現代政治学叢書13) 東京大学出版会。

小杉泰2006.『現代イスラーム世界論』名古屋大学出版会。

酒井啓子1991.「イラクの都市・地方間格差問題」清水学編『現代中東の構造変動』アジア経済研究所 57-92。

—— 1997.「イラク」日本国際問題研究所編『中東諸国における民主化と政党・政治組織の研究』日本国際問題研究所 51-70。

サドル, ムハンマド・バーキル1992.『イスラームの革命と国家——現代アラブ・シーア派の政治思想』小杉泰編訳 国際大学中東研究所。

〈外国語文献〉

al-'Abd Allāh, Ḥamid 1997. *Ḥizb al-Da'wa al-Islāmīya*. Kuwait : Dār al-Qarṭās li-l-Nashr.

'Allāwī, Ḥusayn 1999. *Ḥizb al-Da'wa al-Islāmīya : Ishkālīya al-Ṣirā'*. n.p. n.p.

al-'Arabīya TV (BBC Monitoring) 2005. December 17.

—— 2006. February 21.

Aziz, Talib 1993. "The Role of Muhammad Baqir al-Sadr in Shii Political Activism in Iraq from 1958-1980." *International Journal of Middle East Studies* Vol.25, No.2 (May) : 207-222.

—— 2002. "The Political Theory of Muhammad Baqir Sadr." In *Ayatollahs, Sufis and Ideologues : State, Religion and Social Movements in Iraq*. ed. Faleh A. Jabar, 231-244. London : Saqi Books.

Batatu, Hanna 1978. *The Old Social Classes and Revolutionary Movements in Iraq*. New Jersey : Princeton University Press.

Faql Allāh, Muḥammad Ḥusayn 1982. "Taḥdīm." In *Risālatu-nā*. 3rd ed. ed. Muḥammad Bāqir al-Ṣadr, 9-19. Tehran : Maktaba al-Najāh.

al-Ḥakīm, Muḥammad Bāqir 2000. "Naẓarīya al-'Amal al-Siyāsī 'inda al-Shahīd al-Sayyid Muḥammad Bāqir al-Ṣadr." In *al-Imām al-Shahīd Muḥammad Bāqir al-Ṣadr : Sumūw al-Dhāt wa Khulūd al-'Aṭā'*. ed. Majmū'a min al-'Ulamā' wa al-Bāḥithīn, 225-290.

- Beirut : Markaz al-Ghadīr li-l-Dirāsāt al-Islāmīya.
- al-Ḥusaynī, Muḥammad 1989. *al-Imām al-Shahīd al-Sayyid Muḥammad Bāqir al-Ṣadr : Dirāsa fī Sīratihī wa Manhajihī*. Beirut : Dār al-Furāt.
- 2005. *Muḥammad Bāqir al-Ṣadr : Ḥayāt Ḥāfila, Fikr Khallāq*. Beirut : Dār al-Maḥajja al-Bayḍā'.
- Jabar, Faleh A. 2003. *The Shi'ite Movement in Iraq*. London : Saqi Books.
- Ja'far, 'Alī Muḥammad 1996. "al-Ḥayāt al-Siyāsīya li-l-Imām al-Ṣadr." In *Muḥammad Bāqir al-Ṣadr : Dirāsāt fī Ḥayātihī wa Fikrihī*. ed. Nakhba min al-Bāḥithīn, 461-519. Beirut : Dār al-Islām Mu'assasāt al-'Arif.
- al-Khursān, Ṣalāḥ 1999. *Ḥizb al-Da'wa al-Islāmīya : Ḥaqā'iq wa Wathā'iq, Fuṣūl min Tajriba al-Ḥaraka al-Islāmīya fī al-'Irāq ḥilāl 40 'Ām*. Damascus : al-Mu'assasa al-'Arabīya li-l-Dirāsāt wa al-Buḥūth al-Istrāṭījīya.
- Marr, Phebe 2004. *Modern History of Iraq*. 2nd ed. New York, London : Westview Press.
- Mu'min, 'Alī 1993. *Sanawāt al-Jamr : Masīra al-Ḥaraka al-Islāmīya fī al-'Irāq 1957-1986*. London : Dār al-Masīra.
- Nakash, Yitzhak 1994. *The Shi'is of Iraq*. New Jersey : Princeton University Press.
- al-Nizārī, Mājid 1990. *'Abd al-Ṣāhib Dukhayyil wa Bidāyāt al-Ḥaraka al-Islāmīya al-Mu'āṣira*. Beirut : Dār al-Furāt.
- al-Nu'mānī, Muḥammad Riḍā 1997. *al-Shahīd al-Ṣadr : Sanawāt al-Miḥna wa Ayyām al-Ḥiṣār, 'Arḍ li-Sīratihī al-Dhātīya wa Masīratihī al-Siyāsīya wa al-Jihādīya*. Qumm : al-Mu'allif.
- 2003. *Shahīd al-Umma wa Shāhidu-hā : Dirāsa Wathā'iqīya li-Ḥayāt wa Jihād al-Imām al-Shahīd al-Sayyid Muḥammad Bāqir al-Ṣadr*. 2 Vols. Qumm : al-Mu'tamar al-'Ālamī li-l-Imām al-Shahīd al-Ṣadr.
- Ra'ūf, 'Ādil 1999. *Ḥizb al-Da'wa al-Islāmīya : al-Masīra wa al-Fikr al-Ḥarakī*. Beirut : Markaz al-Dirāsāt al-Istrāṭījīya wa al-Buḥūth wa al-Tawthīq.
- 2000. *al-'Amal al-Islāmī fī al-'Irāq bayna al-Marja'īya wa al-Ḥizbīya : Qirā'a Naqḍīya li-Masīra Niṣf Qarn 1950-2000*. Damascus : al-Markaz al-'Irāqī li-l-'Ilām wa al-Dirāsāt.
- 2002. *'Irāq bi-lā Qiyāda : Qirā'a fī Uzma al-Qiyāda al-Islāmīya al-Shī'īya fī al-'Irāq al-Ḥadīth*. Damascus : al-Markaz al-'Irāqī li-l-'Ilām wa al-Dirāsāt.
- al-Ṣadr, Muḥammad Bāqir 2005a. "Ḥawla al-Isma wa al-Shakl al-Tanzīmī li-Ḥizb al-Da'wa al-Islāmīya." In *Muḥammad Bāqir al-Ṣadr : Ḥayāt Ḥāfila, Fikr Khallāq*. ed. Muḥammad al-Ḥusaynī, 716-718. Beirut : Dār al-Maḥajja al-Bayḍā'.
- 2005b. "al-Usus al-Islāmīya." In *Muḥammad Bāqir al-Ṣadr : Ḥayāt Ḥāfila, Fikr Khallāq*. ed. Muḥammad al-Ḥusaynī, 694-712. Beirut : Dār al-Maḥajja al-Bayḍā'.
- 2005c. "Kayfa takūn al-Da'wa ilā al-Islām." In *Muḥammad Bāqir al-Ṣadr : Ḥayāt Ḥāfila, Fikr Khallāq*. ed. Muḥammad al-Ḥusaynī, 713-715. Beirut : Dār al-Maḥajja al-Bayḍā'.
- Sakai, Keiko 2001. "Modernity and Tradition in the Islamic Movements in Iraq : Continuity and Discontinuity in the Role of the Ulama." *Arab Studies Quarterly* Vol.23, No.1 (Winter) : 37-53.
- Sankari, Jamal 2005. *Fadlallah : The Making of a Radical Shi'ite Leader*. London : Saqi Books.
- Shubbar, Ḥasan 1989. *al-'Amal al-Ḥizbī fī al-'Irāq : 1908-1958*. Beirut : Dār al-Turāth al-'Arabī.
- 1990. *Ta'rīkh al-'Irāq al-Siyāsī al-Mu'āṣir*. Vol. 2. Beirut : Dār al-Muntadā li-l-Nashr.
- Wiley, Joice 1992. *The Islamic Movement of Iraqi Shia*. Boulder : Lynne Rienner Publishers.
- al-Zamān (<http://www.azzaman.com>) 2004. October 13.